

傾城恋飛脚

新口村の段

節季「節季候だいく、だいくは節季候、お目出たいは節季候」

女房「通らしやれく。親方衆と違ふてこちとらは水呑み百姓、こなた衆に遣る米はないはいの」

と、ついでに言はれ、

節季「こりや酷い。如何様、貰ふ節季候より、内の様子はせく候」

と、去ぬれば

女房は糸車、『正月までは休ませ』と、納戸へ取り込みお上の塵、掃き出す表へ

吉平「テイ古手買ひ、紙屑。お内儀さん、紙屑はないかいな」

女房「才、嫌な人ぢやはいの。京や大坂と違ふて在所

（オクリ）前に差し掛かる。

落人の。ためかや今は冬枯れて、薄尾花はなけれど、世を忍ぶ身は後や先、人目を包む頬被り、隠せど色香梅川が、馴れぬ旅路を忠兵衛が、労はる身さへ雪風に、凍える手先懐に、暖められつ暖めつ、石原道を足さきの、大和はこぞ故郷の、新口村に着きけるが。

忠兵「コレ、こゝはわしが産まれ在所。四五町往けば実の親孫右衛門殿の所なれど、不通といひ継母なり。ことに今の身の上を、お目に掛けるは大きな不孝。この藁葺は忠三郎といふて、親達の家来も同然。まあ〜こゝ〜」

と門の口。

忠兵「忠三殿内にか、ア、久しう逢ひませぬ」

とつゝと這入れば

女房は、

女房「アノこちのは今庄屋殿へ。どつからござんしてなんの用。わしや裁際の次郎兵衛後家の仲人で、近

に紙屑はないものぢや。勝手知らぬ人ぢやさうな。町方へ出て買はつしやれ。阿呆な人」

と笑はれて、

咳きながら見廻しく〜帰る程なく。

同行二人、

〜補陀落や、岸打つ波は三熊野の、那智の

おやまの詮議とは、人目にそれと白木綿、笈摺掛けた順礼姿。

八右「おかゝ様、火を二つ貸さつしやりませ。エ、こゝはなんといふ所かな」

女房「こゝは大和の新口村、煙草の火は出させぬ。手の内も法度でござんす」

八右「ア、けんどんな在所だな」

と、家内をきよろ〜睨め廻し、次の村へと出でて行く。

女房「ほんに今日程胡散らしい者のたんと来る日はない。納戸這入りもなるまい。どりや、夕飯の拵へ」と竈の

い頃こゝへ来た故、前方の近付きは知りませぬ。がもし大坂の衆ぢやないか。こちらの親方孫右衛門さんの息子殿、大坂へ養子に往て、傾城とやらいふものをたんと買ふて人の金を盗み、その傾城を手に掲げて、走つたとやら滑つたとやらで、代官所からきつい詮議。孫右衛門さんは久離切つてお上の構ひはなけれど、血を分けた親子なれば、ア、いとしや年寄つてモ、〜きつい案じ。こちの人も馴染み故、もしこの辺り狼狽えて見付けられはさつしやれぬか、とモいかい気苦勞。庄屋殿からは呼びには来る、ヤア寄合ひぢや、ソレ印判ぢや、と節季師走にこゝら辺りは傾城ごとで煮え返る、ア、うたての傾城や」

と、知らねば遠慮もなかりけり。

二人は『ハツ』と胸に釘、打ち領いて、

忠兵「成程々々。大坂でもその評判、わしらは女房連れで年籠りの参宮、懐かしさに寄りました。が、立ちながら逢ふて去にたい。コレ大坂者と言はずに、ちよつと呼んで来て下されぬか」

女房「オ、それは易い事。一返り往て来ませう。が、京のお寺が鎌田村の道場へお下り。先からすぐに参られたも知れまい。それでは余程わしが戻りも遅い。コレ女中さん、飯が仕掛けてある程に、出来損なはぬ様に、差しくべて下んせや」と、襷外して出でて行く。

後は門口はたと閉め、掛金掛けてうつとりと、暫し詞もなかりしが。

梅川「コレ忠兵衛さん、ほんにこゝは剣の中。かうしてあても大事ないかえ」

忠兵「ア、イヤ、男気な忠三郎、頼んで今夜はこゝに泊り、死ぬるとも故郷の土、産みの母の墓所、一緒に埋つまれそなたにも、嫁姑と引き合はせ、未来の対面させたい」

とおろくく涙
梅川も、

梅川「それは嬉しうござんせう。さりながら、私ごとゝさんかゝさんは、京の六条数珠屋町。定めてこ

の口の水右衛門、マ酷い呑み手ぢやぞい。その次は荷持ち瘡の伝が婆、こりやまた村一番の茶飲みぢや。ア、それ、そこへ来る置頭巾は大貧乏であつたが、年貢に詰まつて娘を京の島原へ売つて、よい客に請け出され、金持ちの奥様になつて聳の蔭で田も五町、蔵も二箇所、俄分限。ア、同じ女郎を請け出しても、わしはそなたの親達に憂き目を掛けるが、口惜しいはいの」

梅川「エ、愚痴な、もうくそんなこと言ふて下さなすな、言ふて下さなすな」

忠兵「ア、アレ、あの親仁は弦掛けの藤治兵衛。八十八で一升の飯を残さぬ達者者。今年、ア、丁度錢百ぢや。その後、子細らしい坊主は鍼立ての道庵。あいつが鍼で母者人を立て殺した。思へば

く親の敵」

梅川「ア、もうよいはいな。今腹立てたゝなんの役に立たぬこと」

忠兵「あれく、あそこへ見えるが親仁様。この世の

の間、詮議に合ふてゐさんせう。かゝさんは眩暈持ち、もしものことはあるまいかと、我が身の上より案じられ、今一度京の二親に、一目逢ふて死にとつて、ごんす」

忠兵「オ、道理ぢやくくや。わしもそなたの親達に、智ぢやと言ふて逢ひもしたし。恩のある養子親、妙閑様や許嫁のおすはへも不埒の詫び。そなたの兄忠兵衛殿の志も無にした断り。今一度しみじみ逢ひたい」

と、人目なければ泣いぢやくくり、

梅川「わたしもたんと恩のある、兄さんが猶恋しい」と、互ひに手を取り抱き合ひ、涙の霰はらくくと、袖に余りて窓を打つ。

忠兵「ハア、雪が降るそうな」

と、奥の間は西受けの、反古障子を細目に開け、身遣る野風の畑道、後ろしぶきの吹雪には、担げて急ぐ阿弥陀傘、道場参りぞ続きける。

忠兵「アレく、ありや皆在所の知つた衆。先なは樋

別れお暇乞ひ、せめて余所ながらお顔なりと拝まうと、遙々とこゝまで来た念願が叶ふたか。ア、有難いく」

梅川「エ、エ、ヒエ、あの緦子の肩衣が孫右衛門さんかいな。ほんに親子は争はれぬ。目元なら鼻筋なら、お前によく似たことはいな」

忠兵「サア、それ程よう似た親と子が、詞さへも得交さぬは、なんとした身の因果。ア、お年も寄り足元も弱つた。これが今生のお暇乞ひでござります」

と、手を合はすれば

梅川は、

梅川「今がお顔の見始めの見納め。これ申し、私は嫁でござんする。夫婦は今も知れぬ命、百年の御寿命過ぎて後、未来で孝行致しましよ」

と、口の内にて独り言、

夫婦諸共手を合はせ、とかう涙に咽びある。

孫右衛門は老足の、休みく門を過ぎ。

野口の溝の薄氷、滑るを止まる高足駄、鼻緒は切れて横

様にどつどつ転ぐべし

『南無三』と、忠兵衛漢搔げど出られぬ身、

梅川慌て走り出で、抱き起こしつ裾紋り、

梅川「申し、どこも痛みは致しませぬかえ。お年寄りの危ないこと、オ、マ危ないこと。お足も洗ひ、鼻緒も上げて上げませう。マアくこちへ」

と手を引いて、内へ伴ひ上がり口、腰膝撫でて労れ

ば。

孫右衛門は氣の毒さ、

孫右「ア、戴きますす。どなたか知らぬが忝い。

お蔭で怪我も致しませなんだ。ア、若い女中のお優しい。年寄りと思し召して嫁子もならぬご介抱、もう

く手を洗はしやつて下さりませ、ハテマア手を洗はしやつて下さりませ。幸ひ庭に藁は沢山、鼻緒は

わしがすげます」

と、懐探して取り出す塵紙、

梅川「ア、申し、ここに良い紙がござんす。紙繕り捻つて上げましよ」

と、延べ紙引き裂くその手元、

不思議そうに打ち守り、

孫右「ここら辺りに見慣れぬ女中、マアこなさんほどなたなればこの様に、懇ろにして下さります」

と顔つれづれと眺むれば

梅川いとど胸つぼらしく、

梅川「ハイ、私は、旅の者。私の舅の親仁様、丁度お前の年延で格好も生き写し。外の人にする奉公と

は、さらく、以て存じませぬ。お年寄つた舅御の臥

し悩みの抱き抱え、孝行は嫁の役、御用に立つて嬉しいもの。さぞ連合ひは飛び立つ、サア、飛び立つ様に

ござりませう。が、その紙とこの紙と替へて私が申し

請け、連合ひの肌につけさせて、て、御に似た親仁様

の形見にさせとござんす」

と、塵紙袖に押し包む、涙にそれとは知られけり。

詞の端に孫右衛門、『さてはそうか』と恩愛の、尽きぬ

涙を押し隠し、

孫右「ムウ、こなたの舅にこの親仁が似たといふての

う往生お救ひと、拝み願ふは今参る如来様御開山。

コレ、マ仏に嘘が吐かれうか」

と、どろどろひれ伏し悶え泣き、

梅川も声を上げ、

忠兵衛は障子より手先を出だし伏し拝み、身を揉み嘆く

ぞ道理なる。

猶も涙を押し拭ひ、

孫右「様子聞いたか聞かぬか知らぬが、子を釣り出さうとお上の計らひ。養ひ親の妙閑殿、一昨日牢へ入れられたげな」

梅川「エ、」

孫右「サ、それでつくづく思ふには、実の親を頼りにして、もしも忍んで来はせまいか、来たらばなんぼ

う不憫でも、養子親への義理あれば、匿ふことばさて置いて、親が縄掛け出さねばならぬ。ア、どうぞ来て

てくれねばよいが、ここら辺りを舞ひく、舞ひ付

きははせまいかと、四年以来逢ひもせず、懐かしい

子の顔を見ぬ様にくと、雑行ながら神叩きも、不

のが悲しうござるはい。ア、それを思へば一日も、早

憫さからおぢやるはい、不憫さからおぢやるはいの。ア、とは言ふものゝ若死にするも人の一生。義理ある親を牢へ入れ、おめくくと逃げ隠れは、末世末代不孝の悪名。所詮遁れぬ命なら、一日なりと妙閑殿を、早う牢から出すのが孝行。サ、サ、覚悟極めて名乗つて出い、覚悟極めて名乗つて出おれ。ア、今ぢやない、今ぢやないく、今のことではないはいやい。したが、それもどうぞ親の目に掛からぬ所で縛掛かつてくれ、ヨ。エ、現在血を分けた子に、早う死ぬと教えるも浮世の義理か、是非もなや。なぜ前方に内証で、かうくした傾城にかうした訳で金が要ると便宜でもしをつたら、久離切つても親子ぢやもの、隠居の田地を売り立てゝも首繩は掛けまいに。皆あいつが心から、その身も狭い苦をすつて、いとしばなげに嫁御にまで、思ひも寄らぬ憂き目を見せ、知音近付き親にまで、隠れる様に身を持ちなし、碌な死もせぬ様に、この親は産み付けぬ。エ、憎い奴ぢや、憎い奴ぢや、憎い奴ぢやと思へども可愛うござ

孫若「ア、コレ益体もないく、益体もない。たつた今も言ふ通り、たとへ詞は交さいでも、顔見合はしたりや縛掛けるか、俺が口から訴人せにや養ひ親への義理が立たぬ。なんぼ義理が立てたいとて、親の手づからどう縛が掛けられうぞ、どう縛が掛けられうぞい」

梅川「御尤もでござります。そんなら顔を見ぬ様に」と、傍に有り合ふ手拭ひ取り、泣くく後ろに立ち廻り、

梅川「慮外ながら」

とめんない千鳥

梅川「御不自由にはあらうが、かうさへすれば、傍にござつても構ひはあるまじ」

孫若「オ、忝うござる。物言はずと顔見ずと、手先へなと触つたら、それが本望逢ふた心、親子一世の暇乞ひ。が、コレ必ずこなたの連合ひに、もの言はして下さるな」

と、悦ぶ内に忠兵衛は、嬉しさ余り駆け出でて、

る」

と、泣き沈み、分けたる筋筋ぞ哀れなる。涙の隙に巾着より、金二包み取り出だし、

孫若「これは京の御本寺様へ上げうと思ふた金なれど、嫁と思ふて遣るではない、只今のお礼のため。これを路銀にちつとなど、遠い所へ往て下され」

と、渡せば

梅川押し戴き、

梅川「お心付いたこのお金、逆様ながら戴きます。大坂を立ち退いても、私が姿目に立てば、借駕籠に日を送り奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜を明かし二十日余りに四十両、遣ひ果たして二歩残る。金故大事の忠兵衛さん、科人にしたも私から。さぞ憎からう、御腹も立たうが、因果づくと諦めて、お赦しなされて下さりませ。親子は一世の縁とやら、この世の別れにたつた一目、逢ふて進せて下さんせ」

と、奥の障子を開くるを
引き止め、

親子手に手を取り交はせど、互ひに親とも我が子とも、言はず言はれぬ世の義理は、涙湧き出る水上と、身も浮くばかり泣き託つ。

折から聞こゆる多くの人音、

二人を奥へと突き遣り突き遣り、

孫若「ア、これく女中、あの物音は慥かに捕手。この裏道の小川を渡り、藪を抜ければ御所街道。サ、

早うく」

と氣を揉むところへ。

順礼姿の八右衛門、

利平も共に蚤取り眼、

役人大勢打ち連れ立ち、

八右「この内が氣ぶさいな」

と、どかくくくと込み入るところへ

組子一人駆け来たり、

捕手「所は長谷の山続きに梅川忠兵衛と名乗る者、休みをつたを追つ取り巻き、絡め捕らんと致せども、なかく手に合ひ申さず」

と、聞くより小頭こがしら

小頭「さてこそく、来たれ、続け」と引つ返せば、

二人も共に飛んで行く。

孫右衛門は飛び立つ嬉しき、『天の助けかかた助けな 忝かたじけない』と、裏道見遣つて伸び上がり、

孫右「オ、そうぢやくその道ぢやぞ。ア、ソレその藪をくぐるなら、切り株で足ツ、々突くな」

と、届かぬ声も子を思ふ、

平沙の善知鳥血の涙、長き親子の別れには、安方やすかたならで安き気も、涙、涙の、浮世なり

【2026. 1. 15】